

卷 頭 言



— 若い人々に望む —

俵 國 一\*

日本では学術上の基礎研究は割りに進んでおる点もあるが、実地応用の方面がこれに伴わぬという声がある。戦前から唱えられたことであるが、更に敗戦後米国の有識者が来朝せられ一層その声が大きくなつた。この点学術雑誌の上にも現われて居るので、「鉄と鋼」を見ても立派な研究成果が書かれてあるが、その結論に於て実地と結びつけこれを実地に應用すればどうなるか、その応用の結果迄は書かれないにしてもその理想とする適用の範囲を指示して貰い度い。外国の例を見ても（最も戦後私は外国専門雑誌を読まないから誤れるかも知れないが）、独逸のスタール・アイゼンには可なり現場の新施設などの記事があり、英の鉄鋼インスチテュートでは戦前から実地に関する記事が少なくないと叫ばれたが、戦後毎月の発行になり実地のことが多く取り上げられたように思う。米国の雑誌には戦前から学術研究と同時に実地のことがあると覚えて居る。

日本ではその欠を補う為めか殊に敗戦後盛んになつたことは各製鉄会社で自ら学術雑誌を印刷発行せらるることで誠に結構な現象である。その発行せらるる弁に某誌に依ると、学会の機関誌には論文が輻湊し容易に出ないことが一つの理由とされておることもあつた。誠に遺憾であるが「鉄と鋼」に於ては最近その紙数を増されて、その欠点を補わんとしておらるる。

私の知つて居る各会社の雑誌を上げると、製鐵研究は明治四十二、三年頃から八幡製鉄所の技手陣の手で創設せられたもので、今回八幡製鉄株式会社の本社にて直接出版せらるる様になつた。富士製鉄株式会社にては本社で富士製鐵技報を出さるる外に室蘭製鉄所より技術會誌が、釜石製鉄所からは釜石技報が刊行せられておる。日本鋼管株式会社からは鋼管技報を、住友金属工業株式会社からは住友金属を、神戸製鋼所からは神戸製鋼を、東洋鋼板株式会社からは東洋鋼板を、大同製鋼株式会社内電気製鋼研究会からは電気製鋼を、東都製鋼株式会社からは東都製鋼を、鉄鋼連盟からは月三回の鐵鋼界報の外に月刊鐵鋼界を出しておられる。日立評論社から出る日立評論には時々特殊鋼に関する論文が出ておる。

その外に八幡製鉄株式会社では技術研究所研究報告又は技術情報や海外製鉄技術集録を時を選ばず刊行されておる。外に各大学及び研究所の紀要や報告がある。私の最も喜ぶことは各製鉄会社から出るものはその用紙が良質であり、掲載してあるものに実地のこと、新設備、実地作業のことが多し、殊に面白く読むのは製品に対するクレームに関し、これが改善方法その善後策の書かれた点である。これで製品の品質も向上し需用者の御気にも入るようになると思う。

新進鋭の若い技術者は学術雑誌を味読せねばならぬ、他人の書かれたことで思い当り一步前進するものである。此点神戸製鋼所の浅田社長がたしか「神戸製鋼」で述べられ、それを鉄鋼連盟の鐵鋼界に転載された記事に満腔の敬意を表す。全くその通りである。又論文を書く社員各位に於ては研究の結果又は作業の成果を文章に現わすことが必要である。そこで始めて自分の成し遂げたことに若し誤りがあれば、それに気付いてなお一步前進することが出来る。

\* 学士院会員，東大名譽教授，前会長，工博

そこで鉄鋼協会の編集に携さわる方に御願ひすることは、「鉄と鋼」誌上に各会社発行の學術誌中の論文のせめてその題目だけでも掲載せらるることである。それらの雑誌は多く非売品であるから、その希望者に対し協会事務当局は仲介者となられ当該会社に申し出でられて、余裕のある場合実費でそれを分与する勞を探つて貰ひ度い。また会社側に於ても面倒な事務であるが、後進を裨益する意味にてそれを受け入れて貰ひ度い。そして「鉄と鋼」には掲げた題目の終りに明かにそのことを附記しておいて貰ひ度い。私が現に考えておることをここに述べ、その實を果します、是非とも実行して頂き度い。